太陽がくれた季節（後篇）

校　長　　武井　正明

【21 日準決勝 VS Ｎｂｂ見附球場…北信越大会の切符を賭けた大事な一戦】

夜は何回か目が覚める。不安だからではない。

いよいよ、なのだ。

吉中野球部と運命の出逢い（自分で勝手に思っているだけだが）が始まって、倉敷の全国大会、そして目指してきた星稜に打ちのめされ、完全に勢いを止められた挫折の時…。

大きな壁に跳ね返され、自己を見つめ直し、彼らは幾重もスケールアップした。

それを確信する日が、今日だ。

その雄姿を観るのが待ちきれなくて、眠れなかった。

対戦相手は５月の再戦だ。長打力と確実性を兼ね備えた四番打者と、スライダーと沈む球を投げ分けるエースがいる。簡単な相手ではないことはわかっていた。

試合は初回先制するも追いつかれ、また引き離す展開、２－１で勝ち切った‼　２年のスタンドキャプテンを中心とした大応援団も、いつに増して力を与えた。

勝った瞬間、涙でナインがよく見えなかった。天国の親父に見せたかった。いや、きっと上から目を細めているだろう…。次なる舞台は福井だ。夏の楽しみが、また増えた。

【22 日決勝ＶＳ新妙妙 三条パール金属スタジアム】

この決勝戦で、吉中野球部のチーム力はさらに厚みを増した。

日頃は控えに回っていた選手達が、この大舞台で力を発揮した。背番号 11 左打者が巧く芯で球を捉え２点適時打。続く背番号 13 も、練習通りにしっかり叩きつけて確実に追加点を挙げる。スタメンの１年背番号 20 新時代の担い手、落ち着いた球捌きや見事な身のこなしに驚かされる。試合ごとにヒーローが入れ替わる。

なぜ、それができるのか。

彼らが日頃から「そのつもり」で常に準備を欠かさないからだ。

レギュラーはいい。試合で調整もできる。控えはそれができない。だからこそ腐らずにベンチで試合のイメージを、いかに自分事でできているかが、こういう時に出る。

ケガでベンチの背番号１よ。きっと君は今まで見えなかったものが見えているに違いない。この辛抱と忍耐の経験は、必ず君の野球人生に倍になって返ってくるぞ。

彼らの陰の努力に頭が下がる。また、彼らの活躍を、我が事のようにみんなで喜ぶ一体感と明るさもいい。このままこれで行け。来月の今頃、きっと俺たちは佐賀にいるぞ。

吉中野球部は、本当にいいチームになった。

全国一の星稜に叩きのめされたからだ。

本気で戦いに行って、負けたからだと思う。君たちは星稜から、多くのことを学んだ。

これからも熱い夏は続く。

青春なんか、とっくに終わったものと思っていた。でも実は、今が私の青春なのかもしれない。年齢ではない。

まだまだ夢を見させてくれ。私はこれからもずっと、君たちを追いかけていく。